

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：33201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284129

研究課題名(和文)近世文書料紙の形態・紙質に関する系譜論的研究

研究課題名(英文)Genealogical Research on the Early Modern Document Paper Form and Quality

研究代表者

本多 俊彦 (HONDA, Toshihiko)

高岡法科大学・法学部・准教授

研究者番号：80410281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近世文書原本の料紙について、物理的な計測及び繊維の顕微鏡観察によってその紙種の紙質を究明し、中世文書のそれからの系譜を具体的に検証し、中国大陸・朝鮮半島の文書からの影響をも確認することによって、近世文書料紙の特徴を実証的に明らかにするとともに、近世史料学の中に料紙論を本格的に位置づけようとするものである。このため、本研究では近世文書の原本調査、古文書料紙復元実験、近世文書料紙に関する文献調査と中世文書料紙研究の成果との比較研究、東アジア製紙技術や中近世中国・朝鮮の古文書料紙からの影響の検討などを行った。

研究成果の概要(英文)：Project aims are to identify the characteristics of the document papers used in early modern period and clarify the actual position of paper theory. Those have been done by investigating the original document paper quality with physical measurement and by fiber observation with microscope, verifying the genealogy to the medieval document and confirming the influence from documents of Chinese continent and Korean peninsula. This project research consists of the following four studies: 1. Original documents investigation of early modern documents, 2. Restorative experiment of ancient documents, 3. Comparative study between reference materials survey on early modern document paper and verification results of medieval document, 4. Examination of influence from paper manufacturing technology of East Asia, ancient documents papers from China and Korea from the medieval through early modern period.

研究分野：日本中・近世史、日本古文書学

キーワード：日本史 近世古文書学 文書料紙 形態 紙質 東アジア 系譜論 中世古文書学

1. 研究開始当初の背景

(1) 近世文書料紙研究の現状

本研究の開始以前において、近世文書の形態及び料紙の特質に関して最も先端的と看做すことのできる研究は、大藤修の「近世文書論序説—近世文書の特質とその歴史的背景についての素描—」（『史料館研究紀要』第22・23号、1991・1992年）であった。大藤によれば、近世においては、村・町を媒介とした文書による統治、官僚制的な統治機構の整備と執務の文書主義、商品貨幣経済の発展による文書主義の社会への浸透を歴史的背景として、文書の作成量が中世とは比較にならないほど飛躍的に増加するという。これにともない、和紙の大量生産が行われ、文書料紙の実用化・簡便化が進み、近世文書料紙の小型化と薄様化が起こったが、このような傾向の対極として、徳川将軍の権威誇示のための発給文書料紙の大型化と厚様化も起こるとする。大藤の近世文書料紙論は、18紙種を数え上げた極めて詳細なものであった。

(2) 文書原本の紙質調査の必要性

大藤の研究は極めて詳細なものではあったが、挙げられた紙種名の根拠は文献史料のみに拠ったものであり、紙質の説明や、中世から近世への文書料紙の系譜を考えた際、文書料紙の実態に沿わない部分が看取されるものであった。つまり、大藤の研究では、近世文書料紙原本の紙質調査に基づいた実証にまでは至れていなかったということになる。そこで、大藤の近世文書料紙論を実態に即したものにするためにも、文書原本の紙質について、科学的な観察と測定による検証が必要であると考えに至ったのである。

研究代表者の本多は、中世文書料紙科研に研究協力者として参加し、従来の料紙研究では行われたことのなかった古文書原本の料紙の縦横寸法・厚さ・重量・簀目・糸目・板目・刷毛目・紗目等の物理的計測、繊維束・漉き斑・填料・不純物・繊維の太さ・密度の光学的観察等、新しい料紙研究の方法を学んだ。そして、この方法の近世大名発給文書の料紙研究においてその応用を既に試みていたが、この分野は大藤もほとんど未着手であり、その全容解明だけでもかなりの時間を要するものであった。このほか、大藤の研究では重点から外れている町方文書や公家・寺社文書の料紙をも射程に入れた、近世文書全体にわたる料紙についての共同研究を行う必要性があったのである。

2. 研究の目的

近世文書の料紙には多様な紙種があり、文書の用途によって細かく使い分けられたことが既に明らかにされている。しかし、それら多様な料紙についての、具体的な紙質にまで立ち入った実証的解明には至っておらず、また、中世文書料紙からの系譜についても首肯し得る説明を得ることはできていない。本研

究では近世文書原本の料紙について、物理的な計測及び繊維の顕微鏡観察によってその紙種の紙質を究明し、中世文書のそれからの系譜を具体的に検証し、中国大陸・朝鮮半島の文書からの影響をも確認することによって、近世文書料紙の特徴を実証的に明らかにするとともに、近世史料学の中に料紙論を本格的に位置づけることを目指した。

このような目的を達成するために、本研究では次の4点を柱として調査・検討を進めた。

- (1) 近世文書の原本調査
- (2) 古文書料紙復元実験
- (3) 近世文書料紙に関する文献調査と中世文書料紙研究の成果との比較研究
- (4) 東アジア製紙技術や中近世中国・朝鮮の古文書料紙からの影響の検討

3. 研究の方法

(1) 研究方法の系譜

本研究は、平成4-6年度科学研究費補助金総合研究A「古文書料紙原本にみる地域的特質・時代的変遷に関する基礎的研究」（代表：富田正弘）、平成14-16年度基盤研究A「禅宗寺院文書の古文書学的研究—宗教史と史料論のはざま—」（代表：保立道久）、平成15-19年度基盤研究A「紙素材文化財（文書・典籍・聖教・絵図）の年代推定に関する基礎的研究」（代表：富田正弘）、平成20-23年度基盤研究A「東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究」（代表：山本隆志）等の共同研究において新たに開発・確立され、中世文書料紙調査方法として成果を上げてきた、古文書料紙の非破壊調査の方法論を継承し、近世文書料紙研究に及ぼしていくものである。調査方法としては、古文書原本の物理的計測及び光学的観察を中心としている。

なお、研究分担者の小島浩之はこの調査方法を、次のような観点から文書料紙の非破壊調査方法論の1つの到達点と評価する。

- ① ごく一部の専門家の判定に依拠せざるを得なかった料紙の分析・判定において、第三者による客観的な評価や再検証が可能となることを志向している点
- ② 紙のミクロな分析が研究の最終目的ではなく、歴史学研究ないしは資料保存のための一手段として、料紙調査を位置づけている点
- ③ 既存の古文書学各論（様式論、形態論、機能論、伝来論など）との整合性を踏まえている点
- ④ 抄紙技術の観点からの分析を怠っていない点

（天野真志・富善一敏・小島浩之「近世商家文書の料紙分析試論—武蔵国江戸日本橋白木屋大村家文書を例として—」『東京大学経済学部資料室年報』第7号、2017年）

(2) 研究の具体的な方法

- ① 物理的計測

文書料紙の縦横寸法・厚さの平均値・重量を計測して計算によって密度を求める。これは、近代製紙技術研究で既に採用されているやり方であり、楮紙・楮紙・斐紙などの区別や打紙の度合いなどを見分けるのに有効である。また、簀目の1寸あたりの本数や目立ち具合、糸目の間隔と目立ち具合、紙表面の板目・刷毛目・紗目の目立ち具合、漉斑・繊維束・繊維留・異物の混入・風合等を計測・観察することによって、その料紙の製法や品質を判定する。

② 光学的観察

透過光による顕微鏡（倍率100倍）観察により、繊維の太さ、非繊維物質の残存度、填料（米粉・白土など）の有無、繊維の切断の有無、繊維の流れ具合、繊維の詰まり具合、墨付き繊維の有無などを観察し、楮紙・楮紙・斐紙・再生紙などの別や打紙の度合いを再確認し、さらに細かく紙の種類を特定していく。なお、顕微鏡用デジタルカメラで繊維画像を撮影し、再確認や検証の可能性を担保した。

以上のような科学的方法による近世文書料紙の網羅的な調査は従来の研究には存在せず、今回が初めての、極めて画期的な試みであった。

4. 研究成果

(1) 近世文書の原本調査

上杉家文書（米沢市上杉博物館）や山内家文書（土佐山内家宝物資料館〔調査当時〕）などの近世大名家文書や、加賀藩・福井藩・岡山藩などの藩士家伝来家文書（金沢市立玉川図書館近世史料館・前田土佐守家史料館・福井市立郷土歴史博物館・越前市中央図書館・岡山県立博物館・岡山県立記録資料館など）などの武家文書、萩原子爵家文書（東大史料編纂所寄託）などの朝廷・社家関係文書、武蔵国江戸日本橋白木屋文書（東京大学経済学図書館）などの町方文書などの文書原本による料紙調査を実施し、縦横寸法・厚さ・重量・簀目・糸目・板目・刷毛目・紗目等の物理的計測データや、繊維束・漉き斑・填料・不純物・繊維の太さ・密度等の光学的観察データおよび画像データを採取した。これらの成果については、論文などで既に発表されたものもあり、それらは後掲の「5. 主な発表論文等」に示した。また、山内家文書調査については、地元の高い関心もあり、高知新聞社の取材を受け、高知県内で報道された（高知新聞：2013年8月16日12面）。

広範な調査の結果、身分による料紙の使い分けを検出し、それを具体的に実証することができた意義は大きい。例えば、朝廷の院と女院の女房奉書には料紙の使い分けが存在していることが確認できた。また、多くの藩においては、徳川将軍家の発給文書に使用する大高檀紙のような料紙の使用は避けられ

たようである。これらは、文書発信者の身分によって、料紙の使用秩序のようなものが形成されていたことを意味している。また、加賀藩前田家の発給する知行宛行状と、分家である富山・大聖寺藩前田家の発給するそれとでは料紙や形態があり、これらは総じて、発給者側の身分による使い分けと言える。一方、福井藩知行宛行状については、受給者の藩内身分による料紙などの使い分けという事例も検出された。差出書の記し方や用字・用語にこのようなものが投影されることはこれまで知られていたが、受給者の身分による料紙の使い分けは新発見であり、今後の調査では留意すべき重要な視点となった。いずれにせよ、文書料紙に近世社会における身分秩序が投影されていることが確認できたことにより、文書料紙研究の近世史研究への有用性を立証することができた。

(2) 古文書料紙復元実験

古文書料紙復元実験は、近世文書料紙調査によって推定した文書料紙制作方法の検証を、復元制作によって確かめる実験である。本研究では、こうした抄紙実験の実施が可能な我が国でも稀有な施設である高知県立紙産業技術センターにおいて、次のような実験を実施した。

① 大高檀紙・細皺付奉書紙の皺付け・乾燥

料紙の表面に独特の皺が刻まれている大高檀紙と細皺付奉書紙の制作実験を行い、皺の付け方（a. 簀の痕のまま、b. 紙床からの剥ぎ返しによる人工的な皺付け）や干し方（a. 枠張り干し、b. 吊り干し、c. 板干し、d. 縄干し）による紙の仕上がり具合の違いについて確認作業を行った。

② 仙台藩知行宛行状文書料紙の復元実験

東京大学経済学部資料室所蔵の仙台藩知行宛行状2通の文書料紙調査を行い、その調査データに近い紙質の料紙の復元を目指し、2度の制作実験を行った。最初の実験については、小島浩之・森脇優紀・本多俊彦「研究ノート：近世雁皮『複層紙』の復元実験研究」（『東京大学経済学部資料室年報』第6号）にて既に報告している。雁皮の「複層紙」である当該文書原本とそれを意識して制作された復元紙とでは、密度の数値や填料である米粉の見え方に大きな差があり、原料処理や乾燥方法などに現代の抄紙技術との違いのある可能性を見出すことができた。

なお、本実験については、実験に協力いただいた高知県立紙産業技術センターの地元・いの町（高知県吾川郡）が近世から知られる紙漉きの町であることもあって地域の高い関心を呼び、高知新聞社や地元テレビ局の取材を受け、高知県内で報道された。

（高知新聞2016年9月3日25面〔地域1〕

<https://www.kochinews.co.jp/article/46666/>）

③ 三楮紙・宿紙・亜麻（リネン）紙制作実験 三楮紙・宿紙・リネン紙の抄紙方法を確

するため、制作実験を行なった。なお、リネン紙の抄紙実験については、小島浩之・森脇優紀「報告：リネン紙復元実験の試み」(『東京大学経済学部資料室年報』第7号)にて既に報告している。

(3) 近世文書料紙に関する文献調査と中世文書料紙研究の成果との比較研究

近世文書料紙に関する文献調査の成果として、研究分担者の高島晶彦が「江戸時代の紙漉き技術について 外国人から見た日本の紙漉き」(『東京大学経済学部資料室年報』第7号)を発表した。抄紙技術についてはこれまで、国内文献を中心とした検討が行われ、来日外国人の記録資料の検討は盛んではなかった。本研究で行ったような紙漉き実験を体験し、抄紙体験に即した文献の検討ということも、これまでの研究ではあまり取り込まれてこなかった。高島論文はそのような点を融合させた論文であり、今後の文書料紙研究における抄紙技術への視覚の重要性を示したと言える。

さらに、研究代表者の本多俊彦は「前田利常後見期の加賀藩知行宛行状について」(湯山賢一編『古文書料紙論叢』勉誠出版、2017年)において、近年は米粉を填料とする紙であると定義づけられつつある奉書紙について、加賀藩内では米粉を添加しないものを奉書紙と呼んでいることを指摘した。これは、紙種名ごとの紙質の定義が、地域や年代などの違いによって異なっている可能性を示唆したものであり、今後の料紙研究に一石を投じるものである。これらの成果によって、今後はこのような文書料紙研究を科学的に着手に進めていくための基礎作業として、本研究で行った朝廷や江戸幕府の御用紙漉師・柳井家文書調査のような、素性の確かな未使用古紙サンプルの調査・分析が必須となることが確認できた。

近年、研究協力者の富田正弘らによって、中世文書料紙研究の成果が次々と報告されている。富田は「杉原紙系統の系譜—御教書杉原から奉書紙へ—」(『和紙文化研究』第23号)において、中世の杉原紙が近世の奉書紙へと繋がっていくことを明らかにした。また、本多による加賀藩や福井藩、仙台藩などの知行宛行状の整備過程の研究からも、中世的料紙から近世的料紙への移行が確認できた。

(4) 東アジア製紙技術や中近世中国・朝鮮の古文書料紙からの影響の検討

本研究では、中国・朝鮮半島・ベトナム・琉球の文書における料紙調査において、我々が日本の古文書料紙調査で実施している手法が有効であることを確認した。一方で、これらの国々は東アジア漢字文化圏に属しながら、料紙の材料となる植物繊維に植生などに伴う地域の特徴を有する可能性も検出した。このほか、料紙に綾を用いたり、打紙や漉き合わせ、料紙への装飾などの加工を施し

たりする例も看取される。今後、東アジア文書の料紙調査が盛んになっていくであろうが、その際に必要な調査上の留意点も確認することができた。

研究成果としては、富田「朝鮮国文書料紙について—日本中世近世文書料紙との比較—」(『東京大学史料編纂所研究紀要』第27号)や矢野正隆「ベトナムの神勅：九州国立博物館所蔵資料の概要と基礎データ」(『東京大学経済学部資料室年報』第6号)などが発表されている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 17 件)

- ① 高島 晶彦、箭付料紙の自然科学的手法による検討、東京大学史料編纂所附属画像解析センター通信、査読無、第76号、2017、pp. 22-25
- ② 天野 真志、富善 一敏、小島 浩之、近世商家文書の料紙分析試論—武蔵国江戸日本橋白木屋大村家文書を例として—、東京大学経済学部資料室年報、査読有、第7号、2017、pp. 1-15
- ③ 高島 晶彦、江戸時代の紙漉き技術について 外国人から見た日本の紙漉き、東京大学経済学部資料室年報、査読有、第7号、2017、pp. 16-21
- ④ 小島 浩之、森脇 優紀、報告：リネン紙復元実験の試み、東京大学経済学部資料室年報、査読有、第7号、2017、pp. 47-54
- ⑤ 富田 正弘、朝鮮国文書料紙について—日本中世近世文書料紙との比較—、東京大学史料編纂所研究紀要、査読有、第27号、2017、pp. 1-39
- ⑥ 矢野 正隆、ベトナムの神勅：九州国立博物館所蔵資料の概要と基礎データ、東京大学経済学部資料室年報、査読有、第6号、2016、pp. 38-60
<http://hdl.handle.net/2261/72564>
- ⑦ 小島 浩之、森脇 優紀、本多 俊彦、研究ノート：近世雁皮「複層紙」の復元実験研究、東京大学経済学部資料室年報、査読有、第6号、2016、pp. 61-69
<http://hdl.handle.net/2261/72564>
- ⑧ 小島 浩之、記録の媒体・材料・方法からみた戦後70年：歴史学・古文書学と資料保存の視点から、記録と史料、査読無、第26号、2016、pp. 20-25
- ⑨ 高島 晶彦、デジタル機器を利用した古文書料紙の分析、古文書研究、査読有、第

80号、2015、pp. 2-11

- ⑩ 本多 俊彦、福井藩の知行宛行状について、古文書研究、査読有、第80号、2015、pp. 12-39
- ⑪ 富田 正弘、文献史料からみた中世文書料紙の体系と変遷—檀紙と強杉原一、古文書研究、査読有、第80号、2015、pp. 40-73
- ⑫ 富田 正弘、杉原紙系統の系譜—御教書杉原から奉書紙へ—、和紙文化研究、査読無、第23号、2015、pp. 6-37
- ⑬ 富田 正弘、中世における牛玉宝印の料紙について、東京大学経済学部資料室年報、査読有、第5号、2015、pp. 55-75
<http://hdl.handle.net/2261/72573>
- ⑭ 藤田 励夫、続安南日越外交文書集成、東風西声（九州国立博物館紀要）、査読無、第10号、2015、pp. 21-55
- ⑮ 富田 正弘、中世文書の料紙形態の歴史の変遷を考える、歴博、査読無、no. 184、2014、pp. 15-19
- ⑯ 藤田 励夫、安南日越外交文書集成、東風西声（九州国立博物館紀要）、査読無、第9号、2014、pp. 1-59
- ⑰ 本多 俊彦、加賀藩研究の素材について、地方史研究、査読有、第36巻4号、2013、pp. 22-25

[学会発表] (計 9 件)

- ① 高島 晶彦、徳大本伊能図の料紙と地図仕立て、伊能図検証プロジェクト・シンポジウム伊能図を科学する 徳島大学附属図書館所蔵伊能図の学術調査報告、2016. 1. 20、東京文化財研究所セミナー室（東京都台東区）
- ② 高島 晶彦、日記料紙の分析と復元的研究、シンポジウム 文化財を守り、未来へ伝えるために—中院一品記修理事業から、2015. 9. 20、大和文華館（奈良県奈良市）
- ③ 富田 正弘、起請文の料紙について—東寺百合文書に伝存する例を中心に—、東寺文書研究会、2015. 3. 14、京都光華女子大学聞光館（京都府京都市）
- ④ 富田 正弘、古文書・典籍料紙の種類と変遷、仙台市博物館「職員研修」、2015. 1. 4、仙台市博物館（宮城県仙台市）
- ⑤ 高島 晶彦、デジタルを応用した古文書料紙の分析、日本古文書学会研究会「中世・近世文書料紙研究の現状について」、

2014. 12. 6、東京大学史料編纂所（東京都文京区）

- ⑥ 本多 俊彦、福井藩の知行宛行状について、日本古文書学会研究会「中世・近世文書料紙研究の現状について」、2014. 12. 6、東京大学史料編纂所（東京都文京区）
- ⑦ 富田 正弘、文書料紙の中世と近世—杉原紙と奉書紙—、日本古文書学会研究会「中世・近世文書料紙研究の現状について」、2014. 12. 6、東京大学史料編纂所（東京都文京区）
- ⑧ 藤田 励夫、16~17世紀の安南外交文書、History, Culture and Cultural Diplomacy—Revitalizing Vietnam—Japan Relations in the New Regional and International Context、2014. 9. 20、ベトナム大学ハノイ校人文社会科学大学（ベトナム）
- ⑨ 富田 正弘、日本における文書料紙、「中世の古文書展」歴博フォーラム、2013. 10. 9、国立歴史民俗博物館講堂（千葉県佐倉市）

[図書] (計 3 件)

- ① 湯山 賢一、林 謙、高島 晶彦、末柄 豊、富田 正弘、本多 俊彦、天野 真志、小島 浩之、橋本 雄、藤田 励夫、大川 昭典 他、勉誠出版、古文書料紙論叢、2017、896(3-38, 197-208, 209-224, 233-244, 293-320, 455-467, 515-535, 647-662, 685-705, 707-724, 747-762)
- ② 湯山 賢一、青史出版、古文書の研究—料紙論・筆跡論、2017、257
- ③ 小島 浩之 他、勉誠出版、モノとヒトの新史科学：古代地中海世界と前近代メディア、2016、259(26-44)

[その他]

- ① ホームページ
<http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/kaken/25284129>
- ② 新聞報道
高知新聞 2016年9月3日 25面[地域1]
<https://www.kochinews.co.jp/article/46666/>

高知新聞 2013年8月16日 12面

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本多 俊彦 (HONDA, Toshihiko)
高岡法科大学・法学部・准教授
研究者番号：80410281

(2) 研究分担者

末柄 豊 (SUEGARA, Yutaka)
東京大学・史料編纂所・准教授
研究者番号： 70251478

高島 晶彦 (TAKASHIMA, Akihiko)
東京大学・史料編纂所・技術専門職員
研究者番号： 10422437

橋本 雄 (HASHIMOTO, Yu)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号： 50416559

小島 浩之 (KOJIMA, Hiroyuki)
東京大学・大学院経済学研究科・講師
研究者番号： 70334224

天野 真志 (AMANO, Masashi)
東北大学・災害科学国際研究所・助教
研究者番号： 60583317

(3) 研究協力者

湯山 賢一 (YUYAMA, Kenichi)
富田 正弘 (TOMITA, Masahiro)
大川 昭典 (OKAWA, Akinori)
林 譲 (HAYASHI, Yuzuru)
藤田 励夫 (FUJITA, Reio)